辰野町立小・中学校あり方検討委員会に付託された事項に関わる論点整理

資料№2

一　少子化の進展に対応した新たな学校づくりに関する事項

◎検討していく上での基本的な立場
○町として学校のあり方を考える時期に来ている。思い切ったやり方をしないと新しいものは生まれない。
○先にゴールを示す等、スピード感をもって進めたい。
〇財政面も合わせて考えていきたい。

◎新たな学校のスタイル
〇児童生徒数、学級数の多い学校。多くの人とかかわることができ、様々な体験が可能になる。複数の学級があることで学級編成替えが可能になり、人間関係の面からもよい。
〇子どもたちの様々なニーズに対応でき、また、様々な選択肢のある学校。多様性を持った子どもたちが学べる環境にあるとともに、つまずいた時の居場所が確保できるように。
〇子どもも親も教師も笑顔があふれ、みんなが元気で楽しめる学校。いじめ、不登校のない学校。

◎新たな学校での学び
○自然体験、社会体験等体験を大切にした学び。
〇多様性を持った多くの子どもたちの中で、様々な体験をさせてる。
〇キャリア教育等社会とつながる学び。

1　少子化の進展に対応した望ましい教育環境のあり方に関する事項

（１）小・中学校の配置及び通学区に関する事項
　　・学びの適正規模、適正配置及び学校制度　等
（２）小・中学校間の連携のあり方に関する事項

〇何らかの形で学校を集約することが必要

◎学校を集約することのメリット
〇多くの人数
・多くの人とかかわれる
・いろいろな考えにふれることができる
・切磋琢磨できる
・学級として多くの活動、学びが期待できる
〇複数の学級
・学級編成替えが可能となる
・人間関係がリセットできる
・固定化された序列が崩れる
・学年としての活動に幅が生まれる
〇施設・設備面
・一つにお金がかけられる
〇教職員の確保

◎学校を集約することのデメリット・課題等
〇通学の問題
・歩いて通えない
・道草ができない（体験が不足）
〇地域とのかかわり
・学校ボランティアのかかわりが薄くなる
・地域感情、地域文化の伝承の問題

◎課題等への対応等
〇つまずいた時の居場所
・学校の中で小さな居場所、学びの場の確保
・リモートで対応
〇不登校、いじめを前提とせず、不登校、いじめのない学校をめざしたい
〇低学年は地域、高学年は一つ　→通学、地域とのかかわりへの

◎集約の方向
〇小中一貫校、義務教育学校にする。
・小中一貫校、義務教育学校にする。
・まず小学校を集約し、そのあと小中一貫教育校にする。
・西小と東小を集約して大きな学校にし、南小を小さな学校として残す。選択肢として残すことで、ニーズに対応できる。
・低学年は地域の学校、高学年は一つの学校。

◎集約にあたって
〇段階的に、小学校を一つにして、それから小中学校１校（小中一貫教育校）にする。
〇段階的に進めると時間がかかるので、一気に進めた方がよい。
〇小学校の集約については、既存の建物を使うのがよい。
〇小学校中学校は、建物を分けた方がよい

〇町民への周知、地域の理解が必要である。

2　小・中学校と地域との連携のあり方に関する事項

（１）辰野町の良さ、特徴を生かした新たな教育課程等のあり方に関する事項
　　・学校制度及び教育課程の大要　等
（２）教育課程外の活動のあり方に関する事項　等
（３）放課後及び課外活動の位置づけ及び地域連携に関する事項　等

◎地域との連携
○子どもと大人との触れ合いを大切に。
〇地域で子どもを育てることを大事に。
〇地域の思いを大事に。
〇学校の中に公民館。
〇地域の特色を生かした教育。

◎放課後のあり方
〇放課後の子どもたちの学びの確保。
○地域との協力等、学童のあり方。

二　就学前から一貫した支援・指導のあり方に関する事項

（１）多様化する児童生徒への支援・指導のあり方に関する事項
（２）保育園から小学校・中学校の連携のあり方に関する事項
（３）保育園・幼稚園から高等学校、短期大学まで揃った町の良さを生かした学校づくりに関する事項

〇辰野モデルとして、小中高大まで含めての一貫校

◇第７回委員会

◎集約した学校でどのような学びを保障するのか
　〇「個別最適な学び」と「協働的な学び」
　〇地域とのかかわり　等

◎多様化する子どもたちに対応した学校はどうあったらよいか
　〇不登校・不適応傾向の児童生徒
　〇発達障がい傾向の児童生徒　　等

◇第８回委員会

◎集約した学校で、地域との連携をどのようにしていったらよいか
（第７回委員会を受けて）

〇第７回委員会で議論した学び、多様化への対応のために、地域としてできること
〇地域で子どもを育てる
〇地域の思い
〇地域の特色を生かした教育
〇地域が支える教育活動